

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受郵便誌）第三五二号
昭和四十七年五月二十五日印刷 昭和四十七年六月一日発行

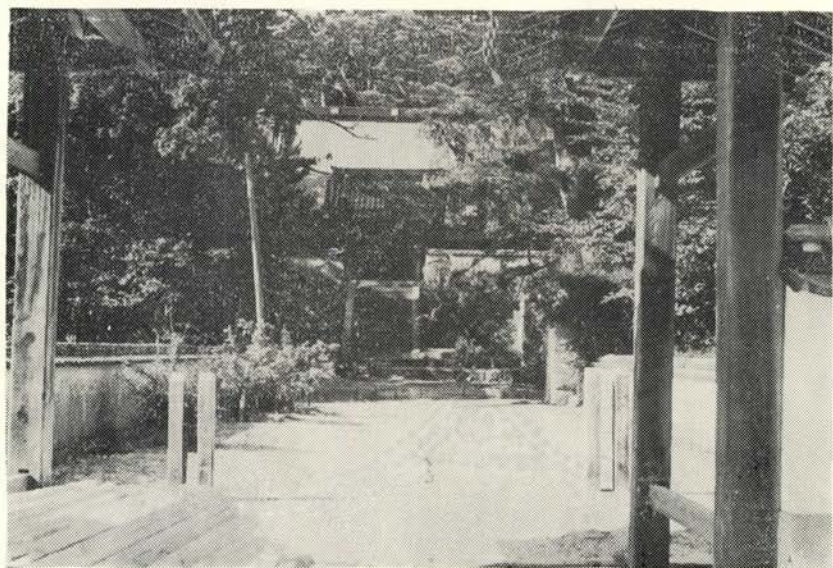


第三十八卷

第六号

1972
6

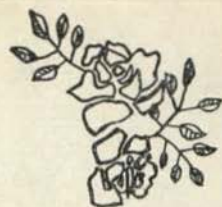
六 月 号



—目 次—

表紙 「目黒祐天寺」松涛達文画

川端さんの仏教的世界「美しき日本の私」から……………	佐 藤 密 雄……………	(2)
私の「一日」……………	大橋誠宏・山田トラ・伊藤雅夫……………	(5)
「浄土文化講座」より法爾の道理……………	後 藤 真 雄……………	(8)
〈随想〉夕鶴によせて……………	岡 崎 澄……………	(12)
聖典解説⑤ 一紙小消息〈第三回〉……………	岸 覚 勇……………	(14)
浄土宗史夜話⑤ 懸賞の首奇蹟の念仏……………	三 田 全 信……………	(18)
異僧真覚第六回……………	柴 田 六五郎……………	(22)
一茶と信州人……………	山野井 果 瑠……………	(25)
(新刊紹介)「インド聖地巡拝紀行」「四季の返信」……………		(28)
「道」善導寺への道……………	高 橋 良 和……………	(30)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて……………		(32)



語和声念

すこし大げさに言えば、現代はレジャーに明けレジャーに暮れているような時代である。今後、週休二日制となり、労働の時間より余暇の時間の方が多くなると言われているし、また事実そうなるのでしよう。わたくしは、時代の流れにさからうつもりは少しもない。人間にとつて自由な時間を多く持つことのできることは仕合せであります。ただ、人間は遊び暮すために生れてきたのではないということを知って頂きたいと思うのであります。現代人もあそび暮そうと皆が皆思っているのではないことも充分知って居ります。生きがいというようなことは、人間生存の意義を求めている人が数多くあることも知っています。しかし、何となく、ムードとして人生を軽く生きて行こうというようなものがただよっている気がしてなりません。

真剣に人間というものにとりくむ必要などがどこにあるかというムードです。

人類滅亡などのことばもこのムードの影にちらつています。

科学の進歩は人間をここ迄持ってきました。

いつの時代も転換期とみることもできましようが今日は大きな転換期にさしかかつていると言えましよう。

法然上人も時代の大きな変り目に生きられた方であります。そして深く人間というものをみつめられ、そのどん底から人間いかに生くべきかの道をみいだしになりました。

人間の本当の道はやはり自分で歩んでみなければわかりません、この動揺の世相のなかであって、真面目に道を求め、本当の人間の生ける道をみだし、心豊かに、平和な生活をしてゆきたいと思ひます。もう一度上人の「月かげのいたらぬ里はなけれどもながむる人のこころにぞすむ」という宗歌にもなっているおうたをかみしめてみたいと思ひます。

(佐藤良智)



川端さんの仏教的世界

「美しい日本の私」から

佐藤 密雄

川端さんに会った最後は、北鎌倉の円覚寺での知人の葬儀であった。式の直前だったので会釈しただけであったが、やや浅黒い顔が白く元気がなかった。もともとゆるやかな振舞の方であり、病氣もされたと聞いていたので、さほど気にもとめなかった。それから三日目の夜、テレビの緊急ニュースで、自殺されたときいた。驚きの程は言い現すべくもない。

住いは近く、何かと好意を受け、よく庭園を見に御出だし、御夫妻とも懇意にして頂いた。早朝に、事務服型の上衣をつけて、盆栽の手入をされていた姿はなつかしい。かつて東京でロータリー会員であったとのことで、鎌倉ロータリー色紙展にも協力を願い、そのうち鎌倉ロ

ータリー名誉会員にと、会から交渉係を命ぜられていたが、これは果せなかった。

私には文学を語る資格はない。雪国や古都は読んだことがあるし、最近のストックホルムのノーベル賞受賞の記念公演の「美しい日本の私」は読んだが、文学には無知である。然し記念講演は、日本の高僧や文人達の澄める心に浄化された日本の自然というか、自然と修道のかかわりというか、私共から見れば日本高僧の聖道の語録ともいえるものである。旧仮名づかいで書かれてあることも、語録の感を深める。この書には良寛の「霞立つ永き春日を子供らと、手まりつきつつこの日暮しつ」や「世の中にまじらぬとにはあらねども、ひとり遊びぞ我はまされる」を挙げて、これを和顔愛語の無垢の言行とたたえ、この良寛の辞世の歌をば解説して、「その人の

辞世が、自分は形見に残すものはなにも持たぬし、なにも残せると思はぬが、自分の死後も自然はなほ美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になってくれるだろう、という歌であったのです。日本古来の心情がこもってゐるとともに、良寛の宗教の心も聞える歌です。」とされている。

昨年の十月のある日、私は居間に通されて、白隠や一休の書を中心に十数本の墨蹟を見せて頂き、書について話を伺った。川端さんが好んで書かれた一休の「仏界入り易し、魔界入り難し」に話が及んだ結果、三十分程と断った時間が半日になったのである。この句について、「美しい日本の私」に次の様に語られている。

意味はいろいろに読まれ、またむづかしく考へられ、ば限らないでせうが、「仏界入り易し」につづけて「魔界入り難し」と言い加へたその禅の一休が私の胸に来ます。究極は真・善・美を目ざす芸術家にも「魔界入り難し」の願ひ、恐れ、祈りに通ふ思ひが、表にあらはれ、あるひは裏にひそむのは運命の必然でありませう。「魔界」なくして「仏界」はありません。そして「魔界」に入る方がむづかしいのです。心弱くてできることではありません。

この文章につづいて、仏教の自力と他力の問題にも触れ、更に他力の悪人往生にも言及して、禅の「祖に逢えば祖を殺し」、親鸞の「弟子一人持たず」を対照させて、これが表裏一体であることを述べられ、易行の内面のきびしさを述べてあるが、これはまた「芸術の厳烈な運命でありませう」と結ばれている。

二

「美しい日本の私」はまた、御自分のエッセイ「末期の眼」についても語られている。編集者の註による「末期の眼」は昭和六年の作であつて、芥川龍之介、梶井基次郎、竹久夢二諸氏の死に触れて芸術家の「業」に肉迫したものである。川端さんによるとこの「末期の眼」という言葉は芥川さんの自殺の遺書から拾つたとされる。

芥川さんは三十五歳で自殺されたが、それに対して川端さんは「末期の眼」の中で、「いかに現世を厭離するとも、自殺はさとり姿ではない。いかに徳行高くとも自殺者は大聖の域に遠い」と記したとされる。また本書では「芥川やまた戦後の大宰治などの自殺を讚美するものではありません」と否定の言葉を述べられているが、然しその続きには次の様な言葉がある。

日本での前衛画家の一人は「死にまざる芸術はないとか、死ぬることは生きることだとかは口癖のようだったそう」ですが、仏教寺院に生れ、仏教の学校を出たこの人の死の見方は、西洋の死の考え方とはちがってゐただろうと、私は推察したものでした。

此れは、仏教の生死観による死に、特別なものがあると考えられ、その上での死を肯定的に見られているとも考えられる。また「美しい日本の私」には、つづいて「もの思ふ人、誰か自殺を思はざる、でしようが、そのことで私の胸にある一つは、あの一休禪師が、二度も自殺を企てたことである」とされる。伝説的奇行や狂雲集で知られる一休禪師の表面を「あの」とされるのであるが、その一休禪師も宗教と人生との根本の疑惑について一度、数人の僧が獄につながれた責任を感じて一度、二度の死を企てて果さなかったことを述べられて、名僧の風流が決死の裏付のあることを詳述されている。

昨春、三島さんの葬儀のあと、三島さんに捧げた武田泰淳氏の弔辞にある「つゆの身はここかしこに消えぬとも、心は同じ花のうてなに」について川端さんと御話したことがある。「花のうてな」から華嚴経の話となったが、その時に、「武田君の仏教はこなれているが、三島

君の華嚴は教意に捉はれてやや堅い。性格によるとも考えられるが、これから三島華嚴が花咲くのであった」という意味を話された。

三

「美しい日本の私」には華嚴の行者、明恵上人の歌を記し、桐尾山の峯に禅觀し、嚴寒の中を、初夜に峯を降り、後夜にまた登る行道の明恵上人の姿をば、雲間を出で隠れする月を友とし、月に送られ迎えられる心境を述べた上人の歌や詞書を引用して、美しく叙述されてある。そして、「暁前の暗い禅堂に座って思索する僧の『澄める心』の光りを、有明の月は月自身の光と思うだろうという風であります」とも述べられる。恐らく川端さんも、今度のことは、きびしい芸術の行道の暁に得られた「澄める心」で、華嚴の世界へと急がれたのもあらう。

川端さんの戒名は文鏡院孤峯康成大居士で、今東光さんの選、文鏡院の文字には、川端さんが、かつて泉鏡花さんに心酔された意味もあるとのことである。文字通り文学の世界に孤峯高くそびえる如くだった故人の冥福を祈りたい。

私の「一日」

大橋 誠 宏

(京都市上京区報恩寺住職
華頂女子高等学校教諭)

「お早うございます。今日も無事に、少しでも世間様のお役にたつことができますように。」

ご本尊阿彌陀如来のみに頼りての晨朝勤行に今日の一日が始まるのですが、日によって如来様のお眼ざしまなこが異なっていて心に感ずるのです。思わず「ハッ」とすることがあり、勤行を終って深く反省させられることがあります。そういう日はまともな満足感をもっては過されません。仏様は私の心をすっかりお見通しで、お叱り下さっているのだと思います。自分の心構えがいかげんなことで、どうして他の人々にみ教を説くことができるでしょうか、実は毎日何時間か若い生徒

諸君と縁起とか無我だとか、倫理とかについて話合っている自分なのです。少しでも邪見があるようでは到底真実のみ教を伝えることができる筈がありません。このように考えますと毎朝に、み仏のみに頼りき礼拝を行なうことが恐ろしくもあり、また希望も沸いてくるのです。

縁に恵まれて若い人達に如来の真実義について語りあう身であるだけに毎朝の心のあり方について充分反省しなければいけない筈なのです。にもかかわらず仏の慈光に触れるとき「ハッ」とする朝が度々あるということは、お恥しい限りであり、同時に凡夫の身のあわれさをしみじみと感ずるのであります。

ひるがえって現下の若い人々のものの考え方について思いを致すとき、あまりにも自己を主張しようとする独善的なあり方に、縁起の理法を自覚し、「お蔭様で。」という感謝の気持ちを起し得ないで自我を通そうとする態度の人々、めに見えない天地一切の恩恵に感謝することを知らない人々のあまりにも多いこと。連合赤軍の若い人々も恐らくはこのような独善的な考えの人々であったのではないでしようか。

これではいけない。至らぬ身ではあるけれど、少しでも多くの若い人々に世のため、社会のため、人々のために喜んでつくし得るような心の持主になってもらうように自分の余生

を捧げねばならない、と心を新たにして寺を出で、学校の門をくぐるのですが、力が足りなさすぎて仲々思うようには参りません。

私は保護司の一人としても社会を明るくし住みよい環境をつくりだすために若い人々は勿論のこと、対象者のすべてに永遠の真理である縁起の理法を自覚してもらい、感謝の念を常に持ち続けてもらうように話合をつづけている積りではあります。力足りずに十分な成果をあげ得ない、お恥しい日々を過しているようなことであります。

み仏の慈光に照され、覆護されて、与えられた私の生命を理想的社会、浄土実現のための捨石として捧げたいと念願するものであります。

山 田 ト ラ

(愛知県豊田市在住)

「おばあちゃん、もう朝だよ」

三歳になる孫の目覚し時計によって、私の一日は始まりです。そして先立った主人の霊前に灯明をつけ、線香を焚き、一日の無事を祈ります。もう余命あまりない私にとり、名も知れぬ片田舎に住む私にとり、「私の一日」と題して、皆さ

ま方に申しあげることもないのが本音でございますが、ただ早く主人に死別して以来、四人の子供をかかえ、世間に恥かしくないひとに育てよう、育てようと、毎日々々の生活の中に、そのことのみを考えてまいりました。

おかげをもちまして、末の子供もこの春学窓を巣立ち、社会人の仲間入りをしました。そして今は二人の孫にかこまれ、何不自由ない毎日を送らせていただいております。

ここにまいります間、決して平坦な道のみではありませんでした。幾多の困難に出合いましたが、その度ごとに私のでき得るかぎりの誠意をもって、ことの解決に当り、なんとか乗りこえてきたのでございます。婦女と見て、のんでかかってこられることもたびたびでしたが、ひと知れず野山に咲きほこる草花の如く、いつしか見事な花を咲かせてやりましよう、がんばってきたのです。

このようにして、我身もかえりみずまいりました私も、六十歳を過ぎ老境の域に入りましたが、今ようやくにして、私が目指した花が家庭内に咲きはじめたのです。この花は目には決して見えるものではございませんが、孫にかこまれた安穩な毎日こそ、何物にもかえられない美しい花でありましよう。この花を咲き続けさせることが、私に残された「私の一日」となっていくことだと思えます。

伊藤雅夫

(神奈川県厚木市在住)

朝起きるとき、毎日がさわやかな日ばかりではない。朦朧(もうろう)として倦怠(けんたい)感をおぼえることもしばしばである。長い人生においてはいろいろの体験を経ていかなばならない。悲しみも喜びも背中合せで、いついかなるときに予想だもしいことが起ることもしばしばである。

今朝も、いつもの日課になっているお仏壇のご供養も終つて、ようやく心の落着きを得たときである。よく遊びに来たK子さんが事故で亡くなったという悲報に接した。寄る年波で、仲間が次第に亡くなっていくことに、一抹の寂しさを感じるこの頃であるが、いまだ身近かに、しかも若い将来ある人の計報はなんとしてもやりきれない気持ちになる。

お仏壇にお灯りをあげて、彼女の面影をしのびながら、お念仏を唱えた。お念仏の声がちりちりと乱れるその間より、彼女の声が聞えてくるような気がして、可愛そうでとめどなく頬をつたわる涙をどうすることもできなかった。

茫然自失(ぼうぜんじしつ)したわたしは、午後久々浅草に出かけた。何年かぶりで浅草寺管長の清水谷恭順大僧正の

お話を聞くためである。そのなかで、こんなお話があった。

大僧正の師匠の師匠、いうなれば祖父分にあたる老和尚に、忍草院忠順という戒律の厳格な方がおられた。もちろん律僧であるから妻子眷属もなければ名聞利養のころも全くない出家者である。その方が常行三昧のお念仏を九十日間なされたというのである。不眠不休の毎日で五十日すぎるころには足が腫(は)れあがりむくんでしまい、歩くことも困難になってしまった。本堂の罫りに棒で手すりをつくり、それにつかまり支えられながら、なお念仏を唱えて九十日間を成遂げられたのである。食事するときと手洗に行く以外に坐することは、もちろん出来ない。四十五歳でこの行をなされ、四十七歳で亡くなっておられるが、亡くなるときに「いい気持ちだ、極楽がみえる」といって安らかに往生されたというのである。大僧正は、お話をしながら目に涙を浮かべながら、師匠から聞かれた体験のお話をなさっておられた。わたしたちには、とてもできない体験であるが、お念仏を行ずる厳しさと真剣さに心うたれ、お念仏の貴さにありがたさを感じた。

夕餉まじかに家に帰り、更めてK子さんのためにしみじみとお念仏を唱えさせていただいた。悲しい一日であり、また人生の機微にふれ、大事な一日をすごしたような気がした。

第十六回「浄土文化講座」より

法爾の道理

後藤 真雄

(東京都江東区円通寺住職)



本日は、日頃法然上人の教えを信じ、念仏の信仰の中に私なりに受け止め、私なりに考えておりますことを——それが果して二祖三代の教義に合うかどうかいささか心配ですが——、私なりにこんな信仰を持っているというのを率直に告白させて頂きまして、その中にご参考になることでもありますれば大変幸いです。

さて、法然上人がどのようなお人であられたかということ、私共にとりましては少なからぬ関心があるわけですね。そこで法然上人を浮彫りにしてまいりますには、一つには歴史を研究致しまして、法然上人が生きられた当時の社会状況に沿って歴史をひもどきながら、そのこ

生涯を辿って行く方法がありますが、もう一つには、法然上人がどんなことをお考えになつていたのか、どういこうとを実際にお話になられたか、そのお言葉の中から上人のお姿を見出して行くという方法もございます。私は特に法然上人のご法語を中心と致しまして考えてみたいと思います。

例えば、『勅修御伝』などに「上人のつねに仰せられるお言葉の中に」などとありますが、その中に、「法爾の道理といふことあり」という条がございます。

「法爾の道理といふことあり。炎は空にのぼり、水はくだりさまに流る。菓千の中にすぎものあり、あ

まきものあり。これらはみな法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は名号をもて、罪惡の衆生を導かんと誓ひ給ひたれば、ただ一向に念仏だにも申せば、仏の來迎は法爾の道理にて疑ひなし」

この法爾ということは法然ともいい換えられますが、自然な、何も疑うこともないという意味で、あるがままに一々問ひ返す必要もない道理というものがこの世にはあります。火を焚けば炎は上の方へ登り、水を流せば低い方へと流れて行きます。だれも疑いを持たない、だれにもどうすることもできないのが法爾の道理なのです。

このことに關して、『解深密經』の中には四種の道理が説いてあります。一に觀待の道理、觀は見ることで見ればわかるという意味です。よく觀の目で見ると申しますが、これは眼、耳、鼻、舌、身、意の六根（六つの感覺）の目で見るということで、目だけで形だけを見ることでは本当の道理を見究められないという意味内容が含まれています。待とは比べることで、ものはよく見、よく比較して見ることに真実の道理が捉えられるということです。二に作用（因果）の道理というものがございます。色々な原因と結果が共に働き合い、寄り集まっ

てものごとができているわけですから、このことを見究めて行くことが本当の姿を知ることであるというわけですね。三が証成の道理で、ものをよく分析して見るということです。すなわち数学的に整理してみれば、觀待の道理とは、 $1 \wedge 2$ 、 $3 \vee 2$ 、 4 は $2+2$ に等しいというように比べ見ることによって理解すること、作用の道理とは、 $2+3 \parallel 5$ 、 $2 \times 5 \parallel 10$ というように足したり掛けたりすると姿形が變つてできくるといふ理解の仕方、証成の道理とは、 15 とは 5×3 であるとか、 $30 \div 2$ であるとかいふように分析して見ることです。以上の三つはすべて可知の道理です。いわば、知ることのできる道理なのです。

ところが、世の中にあるものごとはこれだけでは済まされません。そこで四番目に法爾の道理というものが説かれるのです。これは決して知ることのできない不可知の道理なのです。見ることもできる、聞くこともできる、肌で感ずることもできる、そういうものとは少し趣きの違つたどうにも説明できないものの道理です。量るといふ意味合いで、現量、比量、聖教量などという仏教語もありますが、いくら量つても量りきれない道理がこの法爾の道理なのです。これは法然上人がついに念仏門

を開かれたご信念の一つのほとばしりではなかったかと思われます。

「菓子の中にすぎものあり、あまきものあり」といつておられますが、当時の菓子とは水菓子（果物）のことです。その中にはすっぱいものもあれば、甘いものもあります。なぜ甘いのか、すっぱいのかといつても説明のつかぬものです。これが自然法爾の道理です。ものごとには一つとして同じものはありません。人間の姿もまた爾りです。顔形から体つき、趣味嗜好、能力知恵、財力に至るまですべてが人様々です。

このように世の中の事象の一つ一つがすべて違ってゐることを法爾の道理として、どうにもできないものとして受け取って行くところに、今日の民主主義の根本理念が示されていると思われます。民主主義とは、違つてゐるものの集まりの中から平等の法則を、だれかが我慢し、だれかが補いながら生み出して行くことではないのでしょうか。このような概念の基本的な心のあり方が、もう既に法然上人のお言葉の中には表現されているのです。甘党もあれば辛党もある。若者もいれば年寄りもいる。裕福な人もあれば貧しい人もある。みなそれぞれに違つたもの同志が一つの平等の法則を見出そうとするとしたら

に、法然上人の開創された浄土門の念仏の信仰の根本のねらいがあり、それこそがまた民主主義の根本の立場でもあると思うわけです。

「智慧第一の法然房」と崇められ、あれほどまでに學問に励まれた法然上人が、なぜあのように悩み苦しまれたのでしょうか。報恩蔵に一人籠つて五へんも一切経を読み返され、ひたすらに救いの道を探ね尋ねられた末に善導大師の『観経疏』の一文を見出され、浄土教の一門をお開きになられたのは一体どうしたことだったのでしようか。なぜ、これこそは、と思われたのでしょうか。

それは、法爾の道理——すなわちみな様々に違つた世の中で、これならば老いも若きも、いつてもどこでも、権力があろうとなかろうと、罪が浅くとも深くとも、すべてが平等に救われる道は念仏以外にはないという強い確信を持たれたからなのではないのでしょうか。このような法然上人の尊い信念が、ご法語の中にはおのずと平明な言葉のうちに吐露されているようにも思われます。

事実、私共人間はそれぞれに違つた立場環境に生きてゐるわけですが、ひとたび南無阿弥陀仏の念仏のふところは飛び込んだならば、もうみな同じ口称念仏の信者です。声を出して念仏を唱えることが、あらゆる異

質なものを同化するのです。念とは時々刻々ということ
です。書いてその字のごとく、念とは心の上に今を置く
ことです。二度と再び帰来しないその一刻一刻の中に、
本当に心のこもった一刻を過して行くということが大切
であり、お茶の言葉でいえば、一期一会ということとし
ようか。あの時に心を入れて置きさえすればと思う心、
すなわち入れるべき念を忘れるから残念であり、入れる
べき念がなければ無念ということになるわけです。残念
無念の生活の中には本当の人間生活は宿りません。

毎日の刻々の時に、念に念を入れて、念をして行くの
が念仏の本来の姿勢であります。「念とは称なり」とは
『徹選択集』の中に出てくる言葉であります。正に念
仏のあり方の本質を教えています。例えば、駅員が前方
左右に指をさして信号等を確認し、その上に更に大きな
声までも出して安全を見究めようとするのも、念には念
を重ねて入れた心のありようを示しているといえます。

「念とは称なり」、仏の名を唱えるというところまで、
念には念を入れた信仰の姿が念仏の真実のあり方ではな
いかと思われまします。ただひたすらに念仏を申し続け
れば、阿弥陀如来の深い慈悲はもう自然法爾の道理として
摂め取られているということです。

(文責・編集部)

表紙の解説

東京目黒 明願山祐天寺

浄土宗の名刹として名高い祐天寺の開山は、その寺名が示す通り
近世の高僧、増上寺第三十六世法主祐天上人である。上人は若くか
ら仏心にめざめ、十二歳の時芝三緑山袋谷の碩徳檀通上人を師とし
て出家剃髪し、その後浄土の教法を研鑽し、長じてから千葉生実の
大蔵寺、飯沼弘経寺、小石川伝通院各檀林の貫主として歴任し、増
上寺の法主となったのである。

この間、上人の事蹟は数知れず、今ここでその一々をあげる余裕
はないが、徳川政権五代將軍綱吉公から八代吉宗公までの厚い帰依
を得たことから、その一端をうかがうことができると思う。

上人は老令に至り麻布竜土に隠遁し、自行化他浄業に励んだので
あるが、かつて当寺の前身目黒善久院において、専心念仏の修行を
された因縁から、この地に念仏道場を建立することを念願としてい
たが、遂に果せず享保三年七月十五日西化されたのである。そこで
弟子祐海上人は師の遺言にもとづき、吉宗公の特別の保護のもと、
この地に大伽藍を竣工、祐天上人を開山とし、自ら第二世となり、
竜土の庵室より祐天上人の真影遺骨等に移し、吉宗公によって明願
山祐天寺と命名され、ここに先師の夢を実現したのである。

こうした経緯から当寺には什宝も数多くあるが、今は省略する。
表紙の鐘樓は六代家宣公の追福のため、享保十四年天英院の寄附に
よるものである。

想

随



夕鶴によせて

岡崎澄
(東京都板橋・北園女子学生寮々母)

民話劇「夕鶴」は有名な作品で、学校の教科書に載っていますので、皆さんも御存知と思います。

戦後の混乱期に「夕鶴」を「婦人公論」で読み、生きる方向性を失っていた時に、よりどころになる手がかりを見出した思いでした。上京してから、山本安英さんの「夕鶴」公演を数回観ましたが観るたびに、より深く作品を理解した演出に、感銘深く観る事が出来ました。「つう」の台詞に、次の様な内容の豊かな、美しい言葉があります。

与ひよう、あたしの大事な与ひよう、あんたはどうしたの？ あんたはだんだんになって行く、何だか分らないけれど、あたしとは別な世界の人になって行ってしまふ、あの、私には言葉の分らない人たち、いつかあたしを矢で射

たような、あの恐ろしい人たちとおんなじになって行ってしまう。どうしたの？ あんたは、どうすればいいの？ あたしは、あたしは一体どうすればいいの？ あんたはあたしの命を助けてくれた。何のむくいも望まないで、ただあたしをかわいそうに思っ矢を抜いてくれた。それがほんとうに嬉しかったから、あたしはあんたのところに来たのよ。そしてあの布を織ってあげたら、あんたは子供のよう喜んでくれた。だからあたしは、苦しいのを我慢して何枚も何枚も織ってあげたのよ。それをあんたは、そのたびに「おかね」と云ふものに取かへて来たのね。それでもいいの、あたしは。あんたが「おかね」が好きなのなら。だから、その好きな「おかね」がもうたくさんあるのだから、

あととはあんたと二人きりで、この小さなうちの中で静かに
楽しく暮したいのよ。あんたはほかの人とは違ふ人。あた
しの世界の人。だからこの広い野原のまん中で、そつと二
人だけの世界を作つて畠を耕したり子供たちと遊んだりし
ながらいつまでも生きて行きたかつたのに……だのに何だ
か、あんたはあたしから離れて行く。だんだん遠くなって
行く。どうしたらいいの？ほんとにあたしはどうしたらいい
いの？……

素朴な「与ひよう」が村人の「惣ど」「運ず」の二人に「つ
う」の織つた、千羽織を高く売つて、そのお金で都見物が、
出来るといふ誘いに「与ひよう」も「つう」の純粋な気持ちに
対して悩みながら、都見物にあこがれ、金がほしくなつて行
きます。「つう」は「与ひよう」の、駄駄っ子のようなおね
だりに、しかたなく二反だけ織ります。

あたしはいつまでもいつまでもあんたといっしょにいたか
つたのよ……

その二枚のうち一枚だけは、大切に取つておいてね。その
つもりで心を籠めて織つたんだから。

といつて雪の降つた白銀の野原に、赤い夕日がさす空に、や
せ細つた鶴となつて、よたよたと飛んで消えてしまします。

この哀れ深い「夕鶴」の昔の民話は、現代の私達の生活に

も毎日の、出来事として生きています「与ひよう」は外なら
ぬ、現代人ではないでしょうか。

人間のこの悲しみに対して「つう」の純粋な気持ちを取りも
どしたいという事を、考えること自体がナンセンスと思える
ほど、メカニックになつてしまつています。

「歎異抄」は、メカニックになつてゐる人間を、もう一度人
間らしい豊かさを取りもどして行くための良書と思います。
紙数がなく一つ一つ書けませんが、中でも次の言葉、

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや、しかるを世
のひとつねにいはいく、悪人往生す、いかにいはんや善人を
や云々

は「歎異抄」全体の中心をなし、人間のぎりぎりの生きる問
題を書いてあると思います。

生活につかれなにもかも投出したくなる時に「夕鶴」の美
しい舞台を思い浮べながら台本を読み「与ひよう」の悲しい
心を通して「歎異抄」を読む時には一層ふくらみを持ち読め
るようです。

最近ウーマン・リブ運動が起り、男女同権とか女性がもつ
と主体性をとりもどさなければ等といわれていますが「夕
鶴」の「つう」はウーマン・リブならぬウーマン・ラブをも
う一度考えて見るように語りかけているようです。



一紙小消息

第三回

岸 覚 勇

一(四日市市観音寺住職)

阿はなれがたき輪廻の里をはなれて

われら凡夫はいま迷って六道、即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の中の人界に生れて輪廻の中に在り、なかなか離れ難いものであるが、いまその六道輪廻の中より離れての意である。

阿生れがたき浄土に往生せんこと悦の中の悦びなり

阿弥陀仏の西方極楽は報身報土であって、初地以上の菩薩でなければ生れることは出来ないのである。然るにわれら罪惡生死、煩惱具足の凡夫でありながら、その西方浄土に生れることの出来るのは、この上もない悦であるとの意である。

この句の根拠は善導大師の先義分に「若し衆生の垢障を論ずれば実には欣趣し難し、正しく仏願に託して以て強縁と作

すに由る」と云って、われら凡夫が報身報土の西方極楽へ生れることの出来るのは、全く阿弥陀仏の御本願に乗托するからであるとせられているのに、依られたものであらう。
阿罪は十惡五逆の者も生ずと信じて小罪をも犯さじと思ふべし

十惡五逆の者も生ずとは、観經下品下生の文に「五逆十惡を作りし愚人も、命終の時に善知識に遇い十声称仏すれば、金蓮華を見て極樂世界に即得往生す」と云っているのに依ったものであり、小罪をも犯さじと思ふべしとは、涅槃經に「諸の惡は作すこと勿れ、衆の善を奉行せよ、自ら其の意を淨めよ、是れ仏教なり」と云い、また「戒は仏法の大地なり」とも云われているのに、依られたものであらう。

さればこの句は信仰としては、たとい十惡五逆の罪人である自分であっても、必ず往生出来ると信すべきであるが、然し往生淨土の信仰を持つほどの者は、いかに小罪でも犯すまいと慎むべきであるとの意である。

㊦罪人なほむまる況んや善人をや

罪人なほ生るとは、觀經下品に十惡五逆の凡夫も往生するとしているのに依り、況んや善人をやとは、同じ觀經上品に至誠心、深心、廻向發願心の三心を発した人、上中品に善く義趣を解し、深く因果を信ずる人、上下品に無上道心を発した人等と、善人の往生を明しているのに依られたものであらう。

されば此の句は、十惡五逆の凡夫さえ往生することが出来る、まして善人が往生を得るのは当然であるとの意である。

㊧阿弥陀仏は不取正覺の言を成就して、現に彼国にましますは

とは、阿弥陀仏は無量壽經第十八願に「若し生ぜずんば正覺を取らじ」と誓われたが、既にその誓願を成就して仏と成り、阿弥陀經に「是より西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名けて極樂と云う、その土に仏有します、阿弥陀仏と号し奉る、今現に在して説法し玉う」と説く如く、既に成仏して現に極樂世界に在して説法し玉うているからとの意である

㊨定んで命終の時は来迎し給わん

とは、阿弥陀仏は法藏因位の時、四十八願を発し、その第九願に「設し我れ仏を得たらんに、菩提心を発し諸の功徳を修し、至心に發願して我が國に生れんと欲せんに、壽終の時に臨んでもし大衆のために圍繞せられて、其の人の前に現ぜずんば正覺を取らじ」と誓われている。

善導大師はこの第十九願を、第十八願の乃至十念の念仏して往生する人の得る臨終来迎の益と見ていられるから、法然上人も第十八願の念仏する人は、臨終にはこの第十九願の臨終来迎の利益を獲て、阿弥陀仏、觀音、勢至等の仏菩薩の来迎を得とせられたのである。

㊩釈尊は善哉、我教に随つて生死を離ると知見し給い

とは、釈尊の出世の本懷はこの念仏によって極樂に往生して生死を出離せよとの法門を説き玉うに在りとの意で、觀經にも韋提希夫人の請に應じて定善十三觀、散善三觀の法を説き玉うたが、最後には「汝好く是の語を持せよ、是の語を持せよとは即ち無量壽仏の名を持せよ」なりと、念仏を附屬せられたのである。

また善導大師も觀經散善義に「上来に定散両門の益を説き玉うと雖も、仏の本願に望むれば、意ろ衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」と云つて、釈尊も初めは

章提希のために定散十六觀の法門を説かれたが、最後には阿彌陀仏の本願に望めて一向専称の念仏を勧められている。

されば法然上人も觀無量壽經や善導大師の意を享けて、釈尊は阿彌陀念仏の法によって極樂に往生して生死を出離すべしと教えられたと、せられたのである。

〔六〕六方の諸仏は悦哉、わが証誠を信じて不退の淨土に生と悦び給らんと

六方とは東西南北下方上方のことで、阿彌陀經にはこの六方に在す諸仏の証誠を説いている。乃ち六方恒沙の諸仏は善男子善女人が一日乃至七日の一心不乱の念仏せば、臨終には阿彌陀仏及び諸菩薩の來迎を得て往生を得ということを証誠している。

そして釈尊はこの諸仏の証誠し給うた念仏を修せば、皆阿耨多羅三藐三菩提を得るから、この諸仏の所説を信受せよと勧められている。

されば法然上人も六方諸仏は善男子善女人が自分等が証誠した念仏往生の法を信じて、一たび往生せば二度と退転せぬ不退の淨土たる西方極樂世界に往方すると、悦び玉うであらうといわれたのである。

〔七〕天に仰き地に臥て悦ぶべし このたび弥陀の本願に遇ふことを

とは、われ等十惡五逆の罪人をも含めて一切衆生をして、ただ乃至十念の念仏一つで西方極樂世界へ往生せしむという阿彌陀仏の御本願に遇うことが出来たことは、悦びの中の悦である。

〔八〕行住坐臥にも報すべし かの仏の恩徳を

われら一切衆生を救い玉うかの阿彌陀仏の恩徳を思えば、道行く時も、家に住む時も、座敷に坐する時も、夜臥す時も、四六時中その恩徳を報謝すべきである。

〔九〕頼みても頼むべきは 乃至十念の詞

乃至十念の詞とは、乃至とは上尽一形の略で、かみは信仰に入つた朝より壽命尽きる夕まで、念仏を唱え続ける人を指し、十念とは最後臨終に善知識に遇い念仏せよと勧められて、死ぬまでに十念唱うる時間のあつた人は十念、一念唱うる時間しかなかった人は一念という。

さればわれ等末世の凡夫は、第十八願文の乃至十念の詞、即ち平生より念仏している人も、臨終に十念一念の念仏した人も、悉く皆西方極樂へ往生せしむるという文を頼むべきであるという意である。

〔十〕信じても猶信すべきは 必得往生の文也

必得往生の文とは、善導大師が往生礼讃に第十八願の文及び願成就の文を

若我成仏 十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正覚、彼仏今現在成仏当知本誓重願不虚衆生称念必得往生と釈されたのである。

その意は阿弥陀仏が法蔵因位の時に、我は成仏しようとしているが、十方の衆生がわが名号を称えて少くとも十声しても、若し往生することが出来なかつたならば我は仏にならぬと誓われた。

然るに彼の阿弥陀仏は現に世に在って成仏せられている。されば法蔵因位の時の御誓願は既に成就せられているから、決して虚事ではない。衆生が称名念仏せば必ず往生を得ということを信すべきであるとの意である。

むすび

阿弥陀仏は法蔵因位の砌り「乃至十念若不生者不取正覚」と、たとい十辺でも念仏を唱えた者で極楽に往生しないものがあつたら、われは仏にならぬとお誓いなされたが、既に十劫の昔に成仏せられ、今も現に在して説法し玉うのであるから、われ等衆生の往生も間違いないのである。

故にその阿弥陀仏の第十八願の文を頼み、善導大師の必得往生の文を信じてお念仏すべきである。

そのお念仏も一念十念と数は少くとも、自身を願みてたと

い十悪五逆の罪人であっても、またなかなか念仏一つになり切れぬ愚かな身であっても、極楽往生を疑つてはならぬ。

十方浄土と浄土の数は多いのに、ただ西方極楽を願うのは十悪五逆の罪人も往生出来るからであり、十方諸仏と仏も多い中に偏に阿弥陀仏に縋るのは、臨終には三念五念の念仏者に対して御来迎下さるからである。そして仏道修行の行多き中に唯ひとつ念仏を励むのは、弥陀の本願であるからである。

さればこのたび人界に生れ、弥陀の本願に遇いたるを悦んで、唯一向に念仏すべしとの趣旨で、かの一枚起請文と全く一致するのである。

(完)

新刊 柴田六五郎著

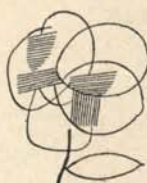
まんだら和尚行状記

附徳本上人小伝・豪潮律師小伝

江戸末期から明治にかけての信仰不毛といわれた時代にまことの宗教者として生き抜いたこれらの人々の記録は今こそ我々に人生の真を語りかける

定価一五〇〇円(千一四〇円)

南無山房発行・本会取扱



懸賞の首奇蹟の念仏

三田全信

一 ほととぎす

「一声は月が啼いたかほととぎす」という句があるが、ほととぎすは容易に啼かない鳥である。しかし啼くと血を吐くような声を出すという。天下の三武将信長・秀吉・家康の人となりを諷刺した句は誰でも知っているが、なかなか巧く表現されているので面白い。

信長：「啼かぬなら殺してしまえほととぎす」

秀吉：「啼かぬなら啼かしてみしようほととぎす」

家康：「啼かぬなら啼くまで待とうほととぎす」

この戦国三武将の性格がよくうかがわれる。浄土宗と深い関係があるのは信長と家康である。

信長の先祖は平の重盛である。重盛は有名な人であって『平家物語』に灯籠大臣として彼の信仰が描かれている。というのは重盛は、滅罪生善の志が深く、東山の麓に四十八間の寺を建立して、一間にづつに灯籠をつるし、毎月十四、十五日に火をともし、若い美しい女性を一間に六人づつ計二百八十人を調べて口口に念仏を唱えさせ、自らその中にまじって「南無安養世界教主、弥陀善逝、三界六道衆生を普く済度し給え」と唱えて回向したという。治承三年九月四十二歳という若さで亡くなっ

たのであるが、その臨終の善知識に法然上人が招かれてお念仏を授けておられる。その後源平の戦が起つて重盛の二子越前三位資盛が越前の織田にのがれ、その子孫が神主となって信長に至ったのである。

信長はこうした因縁から浄土宗を護り、血縁の浄土僧である京都寺町の阿弥陀寺清玉上人や安土問答で有名な貞安上人を近づけた。もっともその頃仏教各宗の中で一番穩健な宗旨だったからでもある。天台・真言・浄土真宗すら武力化した宗旨で、問題の日蓮宗も一揆的な気配が感じられていた。戦前各宗の僧侶が会することがあったが、各宗の宗祖の氣風というものが現われる。それは宗我というものが永い年月の間に育成される結果である。

天正七年五月中旬に関東から玉念という僧が江州安土の浄敎院へ説法に來た。その説法を日蓮宗の信者の建部紹智と大脇伝助というのが聞いていて説教について質問しかけた。玉念上人は「在家の衆と法論しても仕方がないから、日蓮宗の僧と話そう」といったので、二人はただちに京都から日光等五人の僧を招いた。ところがこの法論を聞こうという者が雲霞のように馳せ集ったというのである。信長はその頃安土城を築城中であり、人が群

集することは好まなかったばかりでなく寧ろ神經質になっていた。そこで両宗に調停をかけたが、浄土宗側は如何しようにもと答えたが日蓮宗側は承知せず言論の抑圧はけしからんどこまでも宗論で対決したいと申出た。天正七年五月二十七日安土浄敎院において淨日宗論を行うことが定められた。当日には玉念上人と主論者貞安上人と記録係助念伴僧洞庫とが、すぐごと出場したのに対し日蓮宗側は常光院日諦、久遠院日潤、頂妙寺日珧、記録者大藏坊ほか出世の僧百人ほどが集まり、見物人は山のようであつたという。問答は専門の知識がないと理解しにくいから、要点をとると一二番の問答があつて、釈尊は成道から四十余年間説法されたがこれは方便の教えて最後の法華經において眞実をお説きになったという。日蓮宗では「妙」の字の意を大切にする。しかし方便の經は駄目とするがそのお經の中に「妙」を説いた大切な教えがある。その「妙」は、法華にいう「妙」だがそれをも捨てるのかと貞安上人が迫つた。日蓮宗側は「妙」といっても沢山ある。どの妙だろうかと迷つた。その隙に判者が口を入れて勝負あり、浄土宗側の勝、日蓮宗側の負と判定した。これは今日考えると相撲の勝負さながらである。勝負の世界は敎しい。負けた日蓮宗側は袈裟を

剝ぎとられた上に今後宗論はしないという起請文まで書かされた。勝者貞安上人は後に英雄視され宮中に召されて御前講義をしたり、京都大雲院を建立して仏華（立華）百瓶の展覧を行ったりして頗る文化的な趣味を発揮した。しかし川柳に「宗論はいづれが勝っても釈迦の恥」という句があるが、決して称讃すべきことではない。

信長の血縁に京都阿弥陀寺清玉上人がいる。信長は清玉上人を信頼し、權勢を張るようになって阿弥陀寺の寺域も大きくさせた。ところが本能寺変が起ると清玉上人は大急ぎで本能寺へかけつけ信長主従六人の首を巧に持ち去り阿弥陀寺へ帰った。秀吉が信長のために大徳寺で追善供養するために信長の首を求めたが、清玉上人は頑として従わなかった。なお追及されても困ると考えたのか、信長の首を持って逐電してしまった。秀吉は余儀なく伽羅の名木で信長の像を造って、これを焼いて遺骨のかわりとし大徳寺の中の総見院に埋めた。これまでは史書に見えるのであるが清玉上人は何処へ信長の首を持って行ったかということである。これから夜話が必要なのである。筆者の推定では清玉上人は信長の首を誰にも渡すまいとそれを抱えて信長の建てた現今近江八幡市の西光寺へ行った。そこで懇ろに葬って後に墓石を刻んで建

てた。その墓石は永い年月を経て隙間が出来て来たので、先住柴田玄鳳師が改修された。その時歯骨が出たと筆者に話されたので写真を撮ったが転居の時どこへ入れたかついに見出せない。あれほど秀吉が熱望し、禄と引換えよう、それでもいけなかったら權力で奪おうとした信長の首は血縁の清玉上人によって護られていたとは信長も幸せだったといわねばならない。

二 死線突破

徳川家康は三河の出身で、もと松平といった。松平は三河の賀茂神社の氏子である。これは京都の下賀茂神社の社領があったからである。日本紋章学の權威沼田さんの『日本紋章学』に額田郡岩津村妙心寺の本尊の胎内から松平信光の願文が出て、自ら「賀茂朝臣」といつていることや、葵の紋を用いたことが載せられている。法然上人の一族の中に下賀茂神社の神主になった人もいて、この人が法然上人に帰依し、しばしば招いたことや、法然上人生誕の地美作の稲岡庄には賀茂神社を分祠していることなどから考えると松平徳川は早くから浄土宗の信者であったことが知られる。

家康は幼少から安楽な生活をしていたのではない。むしろ逆境に生立って来た。転々と人質にやられた。今川義元が信長にやられた時、十九歳であったが、先祖の墓の前で自害しようとした。此時菩提寺の大樹寺の住職天室上人が諫めて力戦して敵手から遁れしめた。事は一度あれば二度あるというが、信長が本能寺変に遇った時にも似たようなことがあった。家康は信長に招かれて遊山にでも来たように従者も殆んどなく、突発的な事件だったので縁故深い知恩院へ逃げ込んで自害しようとした。その時一心院に住職していた天室上人は、家康を迎えて、心静かに休まれるようすすめ、護衛につとめたという。そして念仏によって死線を突破する道が開かれると教えた。それから戦場に向う時には施餓鬼の布旗を竹竿につけてそれを先頭に持たせた。その布旗には「厭離穢土」「欣求淨土」と書いてあった。敵はそれを徳川の餓鬼旗といって怖れたという。

切むすぶ太刀の下こそ地獄なれ

懸れやかかれさきは極楽

と詠んだ家康は、すでに悟道に達している。家康はもう一度危い目にあっている。功なり業を終えて国内を統一して將軍の座についた頃殘党武田勝頼の廻し者で、可愛らしい小姓が側近に仕えるようになった。ある日、酒宴があつて家康は酩酊の気分で床に入つたが、日頃黒本尊をおがんでから寝るのを、此日は忘れたが、ふと思ひ出して本尊前で念仏していた。その隙に廻し者の小姓は絶好の機会であると思ひ、秘かに腰刀を抜いて、しとねの上に馬乗りになりざま力一杯に刺した。その氣配に家康はその小姓を召捕え、自首せしめた。小姓の物語を聞いて、「お前は若年ながら主のために一命を抛ってわしを刺そうとした。その志は天晴である。罪を赦してやるから国へ帰れ」といつて放つてやつた。武士の情か仏の慈悲か。黒本尊に念仏する家康は戦の鬼ではなかった。念仏信仰に生きた人間であり、政道には菩薩道が滲み出ている。彼は日課念仏を筆録した。その紙片は現在、各所に残っている。それは浄土宗の信仰に徹した真の専修念仏者の相を伺うことが出来る。



異僧眞覺

第六回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

此の事件と院主の説教は、眞覺が本当の意味で僧侶の境涯に足をふみ入れる契機となった。彼は晩年、此のことを述懐して……あの日の太吉の悪罵と嘲笑こそ正しく如来大悲の慈言であつた……と記している。

敷しい中にもなごやかな万福寺の生活は、眞覺にとって甚だ快いものであつた。三年目の秋の或る日、院主は俄に思いついて言った。

「秋五月は捨坊主^{すてぼうし}いうての、一向ひまじや。一つ今日は石山寺へ詣るか。紅葉もきれいいじやろう」

院主は途^{みち}みち、獲り入れに大童の百姓達に

「御苦勞^{ごくろう}じゃの。御苦勞^{ごくろう}じゃの」

と声を掛けて勞をねぎらつた。

東海道の往還に出ると急に往来が繁くなつた。騎馬で急ぐ侍もあれば、のんびりと駕で煙草をふかし乍ら秋の景色を賞^あでてゆく隠居もある。六部、鳥追い、西国巡礼、傀儡師、腰に草表紙の帳面を提げて途を急ぐ商家の手代等、様々の往き來の人の姿はそのまま人の世の慌しさを物語つていようである。唐橋を渡つて左に折れると、道は勢多の満々たる流れにそつて石山に向う。右手には、芭蕉が幻住庵を結んだ国分山^{くにぶんさん}に伽藍山^{がらんざん}が連なり、その下に石山寺がある。

山門の両側に立つ阿^あ、吽^{うん}の形相すさまじい仁王の像に彼は首のすくむ思いをした。長い石畳を挟んで僧房が建ち並び、その前の溝を清冽な谷水がせせらぎ、僧房の白塀は紅葉^{くれない}の紅を映して秋の陽のすがすがしい温もりの中に続いていた。石

段を上りつめた左手に、本堂が石崖からせり出すように建っている。本尊は秘仏とかで厨子の中に祀られていて拝むことが出来ぬが、恐らく同じ姿を模したものであらう、岩に半伽した五臂の異様な姿の仏が安置され、大勢の僧がその前で読経を続けていた。その経は真覺の初めて耳にするものであったが、薄暗い堂の中にローソクがゆらめて、香煙がもうもと立ちのぼる中に隠頭する仏の姿に、真覺は魂を吸いこまれる様で、夢幻の境を彷徨した。和尚に促されて見て廻った紫



△石山寺山門▽

式部が物語を書いたという源氏の間も、源頼朝が建てたと伝える多宝塔の美しい姿も、万福寺のそれとは全く異った鐘楼の形も、石山寺の名の起りであるという奇巖怪石と、その上に散りかかる紅葉の美しさも、彼の関心をそそらなかった。香煙の中に、瞑目するが如くまた微笑するが如き密教の仏の妖しだけが網膜に焼きついて離れなかった。その仏の姿は彼の眼底から去らぬばかりか、頻りに何事かを語りかけるようであった。

山門を出た所の茶所^{じよ}で出された熱い番茶をすすりながら、勢多の流れに眼をやっている院主に彼は尋ねた。

「御院主さん、あの仏さんは何という仏さんです？」

「ああ、あれは仁平さんや」

と山門を振り返りながら答えた。

「いや。あの本堂の仏さんです」

「なんじや。本堂の仏様か。あれは如意輪観音という観音さんや。あらたかな観音様を祀った寺が三十三有る。それを三十三所の観音さん言うて、皆一生に一度はお参りしたいと巡礼に出る。そら、檀家の弥八も平六も何時か行つたと聞いておらう。あれじや。此処は十三番目の札所になっている。それで巡礼が多いのじや。そらあそこにも三人。こっちからも二人来るじやろう。おりやつ？　ありや大竜和尚じや。おう

「い！大蓮寺さん。大蓮寺さん。此処じゃ。此処じゃ」
院主の大声に傍の人々が驚いて一斉に顔を向けた方角から、六十近い小柄な和尚が、半白の頭で背きつつやって来た。



△石山寺本堂▽

「暫く」
「暫くどころか、もう三、四年も逢わんぞ」
声を併せて笑いながら久淵を恕しあった二人は、すっかり腰を落ちつけて話し込んでしまった。とりのこされた真覚は、愈々妖艶に

して神秘的姿をもって迫って来る如意輪観音に魂を奪われたものの如く、空の一点をみつめて身じろぎもしなかった。

「ところで万福寺さん。弟子が一人欲しいのじゃが誰ぞ居らんかな。尼僧が一人居るが俺はしょっちゅう説教に出るし、祈禱もあるし、忙しうてかなわんのじゃ」

チラ、と真覚の横顔に視線を走らせながら話す大竜和尚に院主は、

「無いこともないが、まあ考えておこう」と答えた。

「そう急くこともないが、いや、やっぱり早い方がよい。一日でも早い方が有難い。そろそろ正月も近づくしな。兎に角頼みますぞ」

「では」

と大竜和尚は又真覚に一瞥をくれて腰をあげた。

「子供等に何か買うて帰るか」

独りごちつつ隣りの茶店を物色していた院主は、

「珍しくもないが他に何も無いからのう」

と、石山の名物だと云う砂糖を固めた菓子を一袋買った。



『一茶と信州人』

山野井 杲 琇

(東京巢鴨女子商業高校講師)

俳人小林一茶(一七六三—一八二七年)は柏原のことについて、

“雪散るやしかも信濃の奥信濃”

と歌を詠んでいる。まったく奥信濃柏原は冬になると雪深い所である。昔は北国街道の宿場として繁栄したが、およそ半年を雪に閉じ込められる生活は心を重くするものがある。一茶はこの地で生まれた。そして一茶は良いにつけ悪いにつけ信州人の性格を覗かせている。

信越線柏原の駅を出て五分足らずで行ける小丸山公園には、一茶の句碑、おもかげ堂、記念館が並んでいてどこを向いても一茶、一茶ばかりである。柏原、奥信濃の

人々の心を歌にくれた一茶のことを思えば当然のことであろう。また信濃の人々は、それほど一茶を、彼の心を自分のそれと同じように大切にしている証拠のあらわれかもしれない。もし一茶が生きて帰り、こんな様子を知ったらまた一句ひねるかもしれない。おもかげ堂は俳諧寺とも言って中を見ると、それほど大きくない一茶の木像がぼつんとある。それが皮肉にも見える。飾られた多くの俳人の句にも知らん顔しているかのようだ。一茶の気持をよく知っている人々が、態とこうしようにも思える。こんな姿が不思議と一茶らしい。ともかく柏原の人々は一茶を大切にしている。小丸山公園をおりて

国道十八号線に出る角の明専寺は一茶の菩提寺で、毎年ここで一茶忌の句会が催される。この日は新そばを賞味する習わしだが、柏原はそば自慢の地で、霧下と呼ばれるそばの味は、他所で出来たものを食べる気にはならんと言う人が多い。実際同じ信州産の中でも一味違う。そう言えば一茶の句にこんなものがある。

「信濃では月と仏とおらがそば」

信州人は故郷信州のことを話すのが人一倍好きである。そして一茶が、

「松蔭に寝て食う六十余州かな」

と詠んでいうようにそんな気持ちになって満足するのである。歌の心のようにまさしく「一茶ここにあり」の心境である。これが大いに他人にとっては滑稽に見えるらしい。

信州人が一茶を大切にするのは、一茶が故郷信濃を片時も忘れていなかったからである。事実彼の故郷を思う歌は多い。一茶が最期に近い時に詠んだ歌に、

「是がまあついの栖か雪五尺」

というのがある。この片時も故郷柏原を忘れたことのない一茶の句は、老年郷里に帰えて、ここまでたどり着いたという侘びしい心境を語るかのようである。

一茶は幼名を弥太郎という。中農の家に育ったが、三歳の時母と離別。以後は祖母に可愛いがられて成長した。その頃の事を、古い追憶を書いた『おらが春』のなかで、「親のない子はどこでも知れる」と僻んでいる。

継母が迎えられて、一茶のその日その日ががらりと変わっていった。仙六という弟が生まれ「仙六むづかる時は、態となんあやしめるごとく父母に疑はれ、杖のうきめにあてらるゝ事、日に百度、月に八千度、一歳三百五十九日、目の腫れざる日もなかりし」という生活になるのである。五年後、一茶には心の頼りであった祖母が死んでしまう。父弥五兵衛は考えたあげく一茶を江戸へ奉公に出すことにした。「父は牟礼迄おくり給ひ、毒なる物はたうべなよ。人にあしざまにおもはれなよ。とみに帰して、すこやかなる良（顔）をふたたび我に見せよ」として……と書かれたような、父子の別れとしては極有り触れたものである。しかし一茶であるからそれが不思議と悲しさをそそる。一茶十五歳（安永六年）の春である。そして俳諧へ親しむことを覚え、その道にいそしみ旅するのである。一茶三十七歳の時、柏原に帰り父の臨終にあう。その時のことは『父の終焉日記』に詳しいが、父は一茶と腹違いの弟仙六を枕許に呼び、田畑を二分さ

せようとするのに、継母、弟とも承知せず、唾み合いをした。家を離れた一茶に対する感情がとがっていたのは無理からぬことであろう。それから時々帰郷して弟とも和解した。永住のつもりで五十二歳の時嫁をもらう。六十歳まで四人の子供が生まれたが、三人は早死。妻も死に後妻ともすぐ離別。六十四歳で三度目の妻が病身の一茶の世話をする事となった。しかし文政十年六月の柏原の大火で家を焼失。やっと残った土蔵に住まうち、菊見に出かけたあとの十一月十九日気分が悪いと寝こんで、庶民の心を明け透けに俳句にうつした一茶はその日のうちに寂した。

一茶には悪いがその生涯は不遇であつた。特に大切な成長期である少年時代は不幸である。こんな一茶だったから柏原の人々は一茶を大切にすることも出来ない。もつとかつては想像させてもらうなら、決していい思い出のない故郷柏原を歌に詠み、たびたび知人にたよりを送ったのは可愛がつてくれた祖母、元気でいてくれよと送り出してくれた父への思いが、一茶の心の中で故郷柏原を忘れさせなかったのであろう。子供として当然のことであろうが、父弥五兵衛が病の床に伏していて、時折り帰郷した一茶は永年の不孝を詫びながら、父の食べたい

と欲していたものを、当時ではまだ遠い善光寺の町までそれを買ひ求めに来たという話もある。こうした一茶を信州人皆口をそろえて一茶が好きだ、そして一茶は偉いと言う。

私も学問を志し、上京してもう六年になろうとしてゐる。一茶には失礼かもしれないが私も一茶と同じように故郷信濃を忘れたことはない。だから自分では一茶の歌の心が、少くなくとも信州人以外の人以上には、一茶の歌を理解することができると思っている。月に一度父からの書留が下宿に届く。そのたびに父、母、妹達家族のことと、一緒に故郷信濃の感傷に素直にひたることにしている。この時の感傷はたまに帰省しており、手を合わせ自分をここまで多くの面で声援し、援助してくれた檀家の人々、先祖（祖父母）のことを考えながら「南無阿弥陀仏」と唱えている時の心境によく似ている。私はこんな時の自分が好きである。現在の若者の中にはこうした感傷に素直にひたることを否定しようとする人が多い。世の流れの中でややもすれば等閑なぞろにされようとしているものに対して、感傷にひたろうとすることは、現代社会に生きる若者としてナンセンスで、将来の脱落者の烙印を押されるべきものなのであろうか。

静永孝英著

「インド聖地巡拝紀行」



高橋良和著

「四季の返信」

介 紹

ゴータマ・ブッダは今を遡ること二千五百年前という時代を借りてインドの大地に人間として生きた仏であった。一体、ブッダ釈尊のお人となりはどのようなお姿であつたらうか。このように、私達仏教徒が遙かに思いを致すことも実際には時の流れの彼方に過ぎ去つて二度と再び帰るわけではない。だが私達にはそのかみ二千五百年という時の隔たりを越えて、ブッダ釈尊の面影を偲ぶただ一つの具体的なすがすが残されている。それは、インドという悠久の大地である。ガンジスの流れは絶えることなく、ヒマラヤの山並みは常に白雪を装う。仏教徒にとってインドはやはり心のふるさとでもあるうか。

本書は、そうした仏教徒の基本的な願いに端を発したインドの仏跡巡礼の旅日記である。日記風に綴られた平明な文体が、ブッダの生涯におけるゆかりの聖地を淡々と紹介している。「この巡礼によって、ブッダ釈尊とわたしのつながりが

ときどき写真のかわりにと、スケッチしているうちに、スケッチ帖がいっぱいになりましたのと、それにこうした短篇の随筆ともエッセイとも言えない、散文がたくさん出てきましたので、たのしい本にしてみようと思つて、こんな風にまとめてみました。

こんなたのしい前書で始まる「四季の返信」を紹介する機会を得た。著者は本誌でもおなじみの、現在巻末シリーズ「道」を執筆中の高橋良和氏である。この本には著者が「やわらぎ」誌に書き、幼年文学の同好会の女子学生と一緒に語り、若いおかあさん方との対話のなかからまとめたもの、五十一篇が収められている。その一つ一つは独立した話で、内容の方向づけ、配列もまちまちであるが、逆にこれが本書の特色でもあり、折々に開くところから気安く読むことができる。そしてその小篇ごとに著者永年に亘る、幼児教育へのひたむきな情熱がにじみ出ており、気安く読み入るわりに

「一層強くなったような気がする」とは、正に著者の本音であろう。

決して奇をてらうこともなく、あるがままに語られる印象記は、旅の途上の著者の思い思いの感想が極めて率直に示されている。そうした意味で、本文には著者の個人的な生活環境が敘述の一部に散見されるが、著者の姿勢が常にうそ偽りのないあからさまの筆記態度であってみれば肯けるところであらう。例えば、ホンコンの空港の待合室で案内に立つイギリス少女を見て、次のような感慨が述べられる。「この田舎もの、マゴマゴしなさんな！」といったようなそぶりが彼女たちにみられ、イギリスこそ、世界第一の最大最強の国であると言いたげな様子で不愉快であった」。すべてがこのような調子で多くの痛快な皮肉と示唆が随所に見える。総じて本書は、「これからインドに行かれる人たちはこれを参考に、利用していただければ、ガリ版刷りを活字にかえた意義も生じ」とあとがきにもあるように、インドの仏跡参拝の恰好の参考者となるであらう。

B5判一七八頁 定価一、〇〇〇円

発行所 東京都千代田区神田佐久間町二一

株式会社 隆文館

は、読後に無形の力を与えられたかのような感じがする。著者はこの贅をつくした本を、一人で書き、まとめ、自筆のカードを不断に用いかけたことを謙遜しているが、活字でぎっしりうまった本よりも、本書のようなシヤレた、読むというよりは見てたのしむのもたまには良いものである。

今日のような喧噪の世にあって、人びとは味気ない生活を強いられている。誰も好んでその生活の中に甘んじる気持はないであらう。何とかその人間不在の社会から逃れ、人間味あふれる生活を望んでいるはずである。しかし、現実にはそうした甘い考え方は禁物であらう。

それでは、何によりどこを求めればよいのか。各々の立場によっていろいろな方法があるであらうし、一概にはいえないが、本書を読むことによって、その一つの答えを与えられることと思う。それはひとの一番純粋な幼児期の教育の指導者として、多年努力された著者の人生訓を探ることができからである。是非一読をおすすめいたします。

変型A5判一〇三頁 定価五百円

発行所 京都市東山区林下町

児童芸術研究所内久留美社



善通寺への道

高橋 良和

土佐の国に流罪になっていたのが、九条関白兼実の計いで、法然上人は、讃岐の国の子松の庄に滞住することになった。

讃岐の国は、兼実の子良経の領地であったので、全然関係のない土佐では、何かについて不便であつたろうという、温い配慮からなのである。

讃岐にあつて、法然上人は、末信の人たちを教化したことはいふまでもないが、その滞住の間は、近くの名刹へも参詣して、古聖のあとを偲んだのである。

四十八巻伝には、そのことについて、

上人在国の間、國中靈驗の地、巡礼し給うなかに、善通寺という寺は、弘法大師、父のためにたてられたる寺なり。

と、ある。

弘法大師は真言宗の宗祖であり、平安仏教の柱であつて、比叡山の最澄、すなわち後の伝教大師などと唐に入り、数々の密教の經典を持参してかえり、高野山を開創した人である。空海と称し、庶民的な信仰は、全国を行脚することにより国々の人々から親しまれ、いたるところに大師の信仰は、今もなお盛んである。

空海は、七七四年に生れたが、その出生地は讃岐国弘田郡屏風浦である。

弘法大師の父は佐伯善通といつた。

その父の菩提を弔うとともに、佐伯家一門の瓦寺として、

この寺を建立し、寺の名を善通寺として、父の名をそのままにしたのである。

昔から、一門のうち出家するものあれば、九属が救済をうけるといわれるが、大師の出家とともに、更に寺を建立するという功德は、仏法において、最上の利益をうけることになったことであらう。

真言宗には、各地に名利が多い。

然し、そのなかでも、弘法大師に關係の深い高野山金剛峰寺、京都の教王護国寺、いわゆる東寺は、大師の開創の寺と、その入滅の寺であるが、それに、この善通寺という出生の寺を密乗三迹といわれて、今日もなお善通寺派の本山として榮えている。

法然上人は、讃岐に配流の間に、この寺に詣でたということは、大師信仰の源泉にふれて、古のこの聖の行化のあとを偲んだのであらうと思う。

この寺には五重の塔がある。その傍の小さな堂が法然堂である。誰が建てたかは知らない。法然上人の参詣のあとを、ここに残したものと思われる。

もう一つこの法然堂につづいて、親鸞堂がある。珍らしいことである。

親鸞聖人の足跡は越後、或は関東であって、四国には、そ

の教化の跡がないと思つてゐるのに、ここにも親鸞堂がある。おそらく、法然上人の弟子であつた、親鸞聖人を偲んでのものであらう。

私は今までいくつかの法然上人の歩いた道を書いてゐるが、その寺々にはほとんどいってよいほど親鸞聖人の像が安置されたり、堂があることに気づくのである。

摂津の勝尾寺の二階堂にもあつた。こは四六年にわたる、法然上人の逗留のところであつて、法然上人のみが滞住したところであるのに、ここにも、親鸞聖人が安置されている。

それは、師匠としての法然上人を慕う気持ちのあらわれであると思うが、もう一つは、やはり真宗の門徒の熱烈な信仰のあらわれであつて、法然上人のあるところ、必ず親鸞聖人ありとする思慕のあらわれであると思ふ。

この寺の親鸞堂もその一つであらう。

善通寺は、香川県善通寺市にある。麦の穂がのびてくるころ、この寺への巡拝の遍路の人々の鈴の音ものどかにひびくのである。

一度詣でん人は、かならず大仏浄土のともたるべし。と、いう銘文がこの寺に残っている。

大師の大衆救済の大きなねがいが、この文のなかにあらわれているようである。

浄土宗列祖の

墨蹟をたずねて

勢譽愚底は知恩院二十三世というより、三河大樹寺開山としてよく知られている。文明七年松平親忠の請待により開山となった。当時、同門兄弟弟子の存問・訓公・存牛らの三河進出もみられたが、はるかにその活躍はひいでていた。愚底の教化は特に規制の点で特筆される。寺院経済・本末関係・僧侶の養成ないし風紀問題におよぶ統制からなっており、厳格な中であつての教化であつた。

今日でも規律・規制というものは多くみられる。犯してはならないことを犯す故に止むを得ず作られる。守るべきことを守っていれば、あらためて作る必要はないわけである。まして僧侶ないし寺院においては社会にあつて指導する立場にある。いわば清職ともいえよう。なにより厳格な心身の修練が大切であり、人の模範とならねばならぬ。戦乱にあげられている世の中にあつては尚更、ひきしめる必要があつた。そこに大樹寺の発展の起因があつたといえる。また松平一門の

尊崇をも得られたのであらう。

愚底は大樹寺の基盤を確立するや永正元年八月知恩院住職となつた。応仁の乱によつて荒廃した祖山の復興に尽力した。そして永正八年再び大樹寺に帰山した。同十年七月、大檀那松平長親の要望もあつて隠居を前に開山式目を作成した。これは法度の集大成ともいふべきもので、その式定の奥書に檀那松平長親・信忠・住持雲譽愚底をはじめ四人の連署をもつて權威づけている。住持と檀那が一致協力して寺院興隆を企てることが知れる。写真一は知恩院住持以前の勤行式定であり、写真二は知恩院住持後のものである。愚底の署名をみても以前とは比較にならない程の洗練され、貴族的な風格がみられ、力強さがしのばれる。これは政治・文化の中心でもある京都に行つた影響である。筆蹟そのものは決して上手とはいえないが、どこか几帳面なところがうかがえる。規制は人間が作る。それに縛られ身動き出来なくなつても困るが、だからといって、全くなくても困る。従つて深い思慮のもとで作らねばならない。人間は甘えがちなもので、ともすると非常識なことをする弱い面をもっている。規制を頭から否定せず、日常の戒めとしての礎えとしたいものである。また、そうした意味での規制作りでなければならぬ。

三河大樹寺開山

勢譽愚底

〈大樹寺勤行式定〉

勤行式定
三河大樹寺開山
勢譽愚底
文龜元年十二月二十六日筆

勤行式定
三河大樹寺開山
勢譽愚底
文龜元年十二月二十六日筆

〈大樹寺開山式定〉

大樹寺開山式定
三河大樹寺開山
勢譽愚底
永正十年八月十日筆

「浄土」購読規定

一部 定価 百円

(送料十二円)

会費一力年金一、二〇〇円

(送料 不要)

浄土

六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十七年五月二十五日印刷
昭和四十七年六月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

新企画でスタートした

『浄土宗新聞』

をご家族みんなで読みましょう

タブロイド版 8 頁 (毎月 1 回発行)

年 額 240 円 (送料共)

発行所 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗務支所内
浄土宗新聞編集室
TEL (03) 436-3351 振替東京 163497

“おぼん・おせがきの施本に好適”

『お ぼ ん』

新書版表紙共 12 頁

価一部 15 円 (200部以上13円) 送料実費

発行所 東京都千代田区飯田橋 1-11-6 〒102
法然上人鑽仰会
電話 (03) 262-5944 振替東京 82187

佐藤治子 著

新刊『旅 日 記』

アメリカ・シルクロード・インド篇

本誌で掲載した世界旅行の随篇を一冊の本にまとめてみました。
「平凡な主婦の平凡な世界旅行」として気軽にお読みいただければ幸いです

四六版 320 頁 単価 1,500 円 (〒140円)

発行所 山喜房仏書林

御用のむきは本会までお申込み下さい。